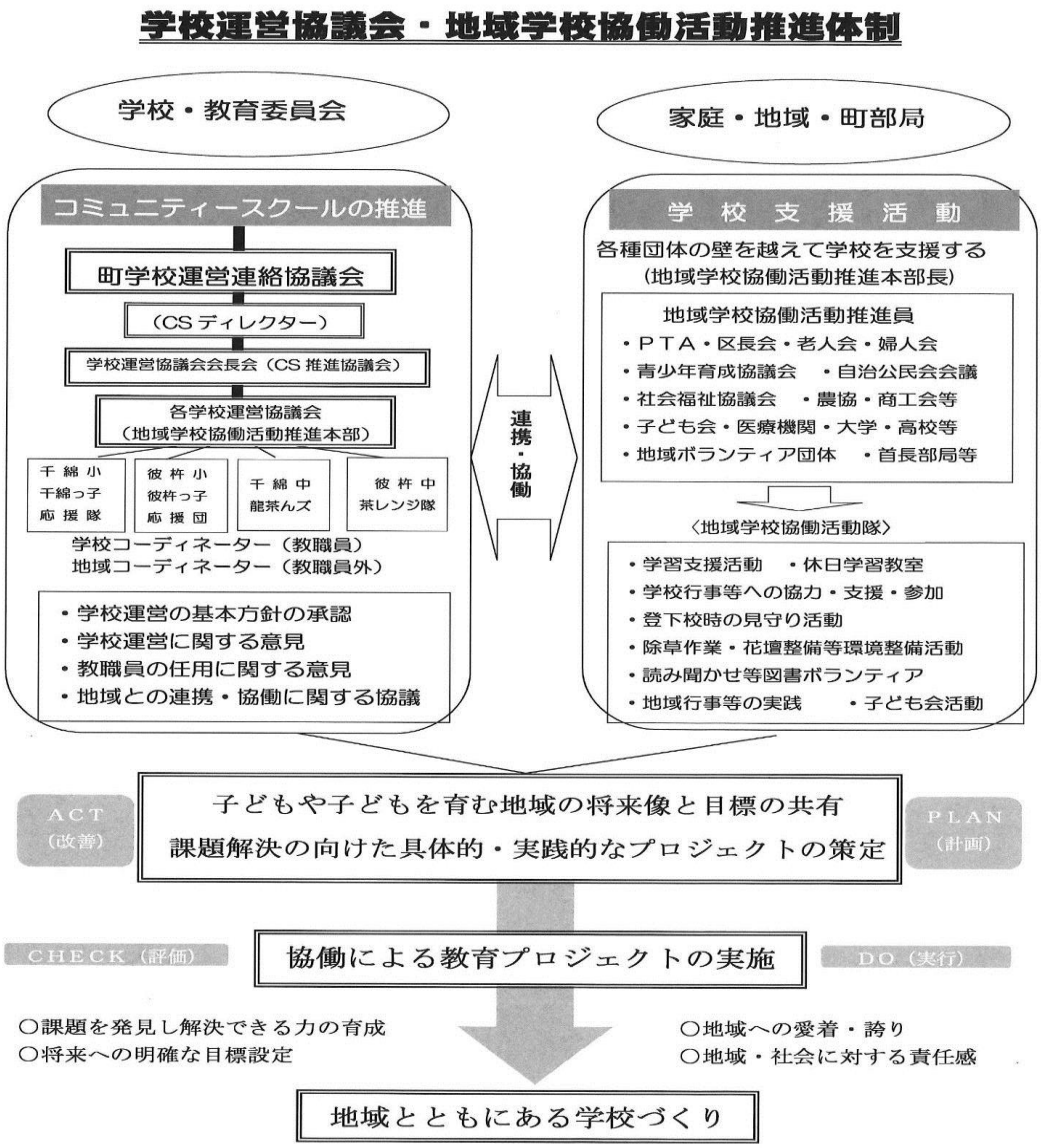
平成 29・30 年度
長崎県教育委員会研究指定

東彼杵町「コミュニティ・スクール」研究紀要

【研究主題】

「ふるさとに誇りと愛着を持ち
心豊かにたくましく生きる東彼杵っ子の育成」
～地域ぐるみで子どもを育てるコミュニティ・スクール～



１　研究主題

「ふるさとに誇りと愛着を持ち、心豊かにたくましく生きる東彼杵っ子の育成」
～地域ぐるみで子どもを育てるコミュニティ・スクール～

２　主題設定の理由

⑴　社会の要請や教育界の動向から

子どもたちを取り巻く環境や学校が抱える課題は複雑化・困難化してきており、教育改革、地方創生等の動向からも学校と地域の連携・協働の重要性が指摘されている。

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）を導入し、様々な地域人材等との連携・協働を通して、保護者や地域の人々を巻き込み教育活動を充実させていくことは、「社会に開かれた教育課程」を実現する上で大変重要である。グローバル化、情報化をはじめとして予測困難な時代をたくましく生き抜く子どもたちを育成するためには、学校と家庭・地域がよきパートナーとして、一層連携と協働を深め、地域総掛かりで学校づくりに努めなければならないと考える。

⑵　地域・学校の実態から

東彼杵町内の４校(小学校２校、中学校２校)は平成２９年度から長崎県教育委員会の研究指定(平成２９、３０年度)及び平成２８年度より文部科学省委託事業「コミュニティ・スクール推進体制構築事業」を受け、町ぐるみでコミュニティ・スクールの推進を図っている。

各校の学校運営協議会では、出された課題や意見などを運営協議会委員で共有し、学校の課題解決に向けて地域や保護者及び関係機関が「熟議」を重ねることで、学校の応援隊を増やすように努めている。地域や保護者の意見を学校運営に反映させていく体制づくりが少しずつ確立できているところである。

⑶　生徒の実態から

東彼杵町の子どもたちは、概して素直で明るく、協調性も高い。しかし、お互いに切磋琢磨して向上しようとしたり、人との交わりの中で自分の思いを十分に発信したりする力は十分とは言えない。コミュニティ・スクールの導入は、多くの地域の力や大人の専門性で多様な教育活動が実現可能となる。そして、地域の方の考えや地域の特性を生かすことで、子どもにとって学校での学びがより豊かで広がりをもち、魅力的なものになると考える。さらに、地域での体験活動や様々な人々との交流を通して、コミュニケーション力や自己肯定感・自己有用感を育み、児童・生徒の生きる力を伸ばすことが期待できるのでコミュニティ・スクール活用を一層充実させていく必要がある。

３　研究の内容

⑴　学校運営協議会の活性化及び保護者・住民への啓発

①　学校運営協議会の定期的開催
②　「熟議」を中心に据えた議論する協議会運営のあり方（部会別熟議）
③　コミュニティ・スクール便りや学校便り及びホームページ等による発信と啓発
④　課題別プロジェクトを核にした実働組織の推進

⑵　持続可能な組織体制づくり

①　地域連携担当教職員、学校運営協議会、地域コーディネーター、地域学校協働本部の各役割と責任を明確に位置づけた組織体制の構築
②　地域学校協働本部の整備
③　地域人材・教材バンクの整備

⑶　コミュニティ・スクールの長所を生かした学校行事・授業の実践

①　学校行事や総合的な学習の時間、特別の教科道徳等の授業において、コミュニティ・スクールの長所を生かした教育活動を展開

②　地域人材・教育材を明記した学校行事計画表や各教科・領域カリキュラム作成

４　研究の実際

⑴　学校運営協議会の活性化及び保護者・地域住民への啓発

①　学校運営協議会の定期的開催

町内各小・中学校で定期的に開催される学校運営協議会では、運営委員が司会、記録、保管を行っている。主な議題としては、学校行事への支援活動、学校環境整備の支援活動、学校運営や学校評価への意見・講評などである。

②　「熟議」を中心に据えた議論する協議会運営のあり方

関係者が当事者意識をもって主体的に学校運営に参画することを目的としたコミュニティ・スクールにあっては「熟議」は重要な活動である。千綿小学校と千綿中学校は５月に学校運営協議会を合同で実施した。目指す子どもの姿を小中で共有し、地域ぐるみでかかわっていけるようにするためである。小中連携をとおして育てていくという視点で「学校間の小中連携」「保護者間の小中連携」「地域として小中連携にかかわれること」をテーマにＫＪ法によるワークショップ形式で話し合いを行った。

③　コミュニティ・スクール便りや学校便り及びホームページ等による発信と啓発

学校便りでコミュニティ・スクールのことを学期に数回程度発信していたが、保護者からはコミュニティ・スクールのことがよく分からないという声があった。その反省を踏まえ、学校運営協議会会長が「コミュニティ・スクール便り」を発行し、その周知を徹底することにした。

④　学校行事・ＰＴＡ活動等への参加呼びかけ

学校運営協議会組織ができても、学校を知らない、児童生徒を知らない、保護者を知らないでは、有意義な活動に広がって行かない。各校ともまずは来校していただくことから啓発に取り組んできた。そのために町内の回覧板や東彼杵町地域情報配信システム等を利用し、学校行事やＰＴＡ活動等の情報を提供している。

⑤　課題別プロジェクトを核にした実働組織の推進

彼杵小学校では、学校が抱える課題を学校・家庭・地域で解決するための実働組織として、学校運営協議会の委員(19 名)を、４つのプロジェクトに分け、それぞれが活動目標や活動計画等を設定し、具体的な活動を通してコミュニティ・スクールを推進している。

＊学力向上プロジェクト・・・基本的生活習慣の定着を目指した取組。学習支援等
＊環境営繕プロジェクト・・・芝生管理、樹木剪定・伐採、営繕等
＊地域行事参加プロジェクト・・・地域行事に児童を参加させ、地域住民との交流を図ったり、地域の活性化を目指したりする。
＊広報活動プロジェクト・・・コミュニティだより、PTA 広報紙等による啓発

⑵　持続可能な組織体制づくり

①　学校運営協議会、学校コーディネーター、地域コーディネーター、地域学校協働本部の各役割と責任を明確に位置づけた組織体制の構築

（学校運営協議会）

コミュニティ・スクールの中核をなす協議機関。学校・地域・ＰＴＡの代表者で構

成している。各委員は校長が推薦し、教育委員会が委嘱をする。「校長が作成する学校運営の基本方針を承認すること」「学校運営について教育委員会又は校長に意見を述べること」「教職員の任用に関して教育委員会に意見を述べること」ができる等の権限をもっている。

（学校コーディネーター）
　教職員が担当し、東彼杵町出身者で地域に精通している職員を活用している。地域学校協働本部と学校をつなぐ、学校の窓口である。担任や学校行事等の担当者からゲストティーチャーやボランティア等の要請があった場合、人材バンクをもとに、地域コーディネーターに連絡し、該当者に依頼をしたり担任・担当者へアドバイスを行ったりしている。

（地域コーディネーター）
　学校運営協議会のメンバーから選出し、学校コーディネーターと連絡調整を行い、各校の学校運営協議会での議題の設定を行っている。

②　地域学校協働本部の整備
　これまでの学校支援会議内にも存在していた様々な学校支援の活動体を地域学校協働体として継続支援を行っていただくようにした。地域学校協働本部は、地域住民、団体等で構成された地域学校協働活動全体を総括する緩やかなネットワークのことである。学校の窓口である地域コーディネーターが学校及び学校運営協議会と連携を取りながら推進している。

③　地域人材・教材マップの作成・整備
　コミュニティ・スクールの導入前から学校支援会議の活動が活発で「登下校の見守り」「高齢者との交流」「学校除草作業」等をはじめ、各校の教育活動を側面から支援する団体が多く存在する。
　しかし、地域人材・団体へのはたらきかけなど周知の不十分さや、地域団体への依頼をどのように行うのかという教職員の手立ての不十分さから地域人材・団体を適切に活用できていない実態がある。また、教職員の異動により、引継ぎが十分にできていないことも考えられる。
　これらの課題を解決し、継続的・計画的に活用したいときに円滑に対応できるように、各校に関わっている人物や団体の地域人材・教材バンクの整備を進めている。

特色ある支援組織
「祖父母の会」（千綿小学校）
　平成２５年度に発足した「祖父母の会」は隔月に１回程度、昼休みの時間に低学年を中心として子どもたちと昔遊びなどで交流している。会員の皆さんは子どもたちにとって人生の達人であり、「生きる力の見本」でもある。子どもたちはおじいちゃん、おばあちゃんたちが大好きなので、会員の皆さんから受ける教育的影響は計り知れない。
　子どもたちは、月に１回程度実施される「茶レンジ交流会」での会員の皆さんとのふれ合いをいつも楽しみにしており、笑顔いっぱいに昔遊びなどを楽しんでいる。毎回、チャレンジ交流会が終わると、会員の皆さんで話し合いを行い、次回に向けての改善や新たな企画を打ち出してくださっている。いつも子どもたちへの教育活動に積極的に参画していただいている。

（３）　コミュニティ・スクールの長所を生かした学校行事・授業の実践
①　学校行事や総合的な学習の時間、各教科において教育活動を展開
（ア）道徳の授業

教育週間の道徳公開授業では、保護者や地域の方々も授業に参加し、生徒と一緒に考え、意見交換をしていただいている。

（イ）家庭科の授業

民生委員の協力のもと、高齢者や幼児等にやさしいユニバーサルデザインの住居について考えた。

（ウ）総合的な学習の時間の授業

東彼杵町役場やＰＴＡ等、町内の各団体に多くの関わりをもっていただき、学校教育の補助役をお願いしている。

〈茶摘み作業〉

〈町おこし講話〉

＜メデイア安全教室＞

（エ）伝統芸能の継承について

千綿中学校区には千綿人形浄瑠璃が彼杵中学校区には坂本浮立が伝統芸能として存在する。ふるさと教育の一環として現在取り組んでいる。彼杵中学校では、10月下旬に行われた坂本地区の収穫祭において坂本浮立の演舞で演奏にも生徒が参加している。

〈坂本浮立練習風景〉

〈坂本浮立〉

〈人形浄瑠璃ワークショッ

（オ）地域ぐるみの避難訓練

彼杵小学校と彼杵中学校では毎年１回、地震・津波を想定し、幼小中と地域とが一緒に避難訓練を実施している。

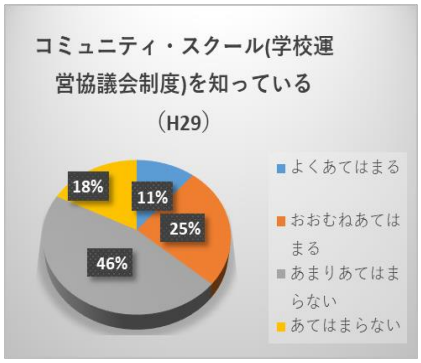
② 地域人材・教育材を明記した学校行事計画表や各教科・領域カリキュラム作成

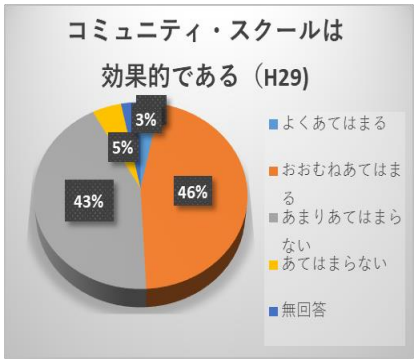
千綿中学校では、今年度から総合的な学習の時間（以下総合学習）の年間カリキュラムを「カリキュラム・マネジメント」の視点で整備を図った。各学年の月毎における総合学習の授業内容と各教科の授業内容、学校行事等をリンクさせるようにしたものである。その単元に関係する人材・教材が明記してあり、作成した一覧表は職員室内に掲示し、いつでも教職員の目に触れるようにしてある。ＰＤＣＡサイクルの視点から教育実践後は成果・反省等を書き込み次年度に生かせるように活用している。

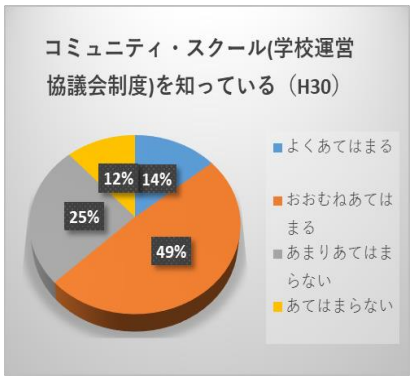
５ 研究の成果及び課題

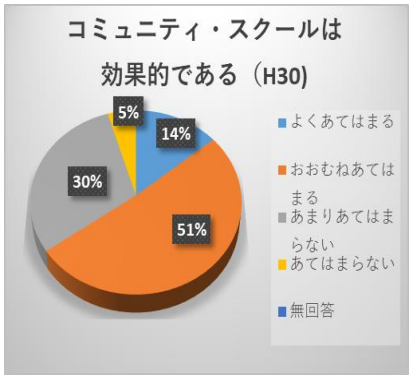
（1） 成果

○ 学校運営協議会の回数を重ねるごとに運営協議会委員の方々の学校や子どもに対する思いが伝わってきている。また、保護者や地域へコミュニティ・スクールに関しての発信を続けてきた結果、運営協議会制度の周知が進み、コミュニティ・スクールの推進を肯定的にとらえている保護者が確実に増えてきたものと考えている。 （下記アンケート結果参照）









保護者及び学校運営協議会委員の方々の所感をまとめたものである。

〇お互いに地域の活動がわかり参考になる。
〇地域で子どもたちの活動を見守れる。
〇児童・生徒たちの活動が直接見聞きでき、保護者とふれあえるのが楽しい。
〇地域と学校の関わりが身近になり、生徒の活動等の様子がわかるようになった。
〇父母だけでなく祖父母も参加できるのでうれしく思う。
〇先生方や児童・生徒、保護者とあいさつをしたり、話をしたりする機会やふれあいができて良かった。

（2） 課題

● コミュニティ・スクールは徐々に浸透している。現状は「与えられたコミュニティ・スクール」から「自ら取り組むコミュニティ・スクール」へと移行中である。つまり受動的な姿勢から能動的な姿勢で学校教育に関わる方が増えている。この姿勢を地域全体に広げ、一時的なものではなく持続的なものへとするために今後も組織の在り方、運営の在り方について研究を続ける必要がある。

● 町内の中学校の生徒へコミュニティ・スクールに関するアンケートを実施した結果をみると、３年間の取組で「コミュニティ・スクール」という言葉は浸透してきている。しかし、コミュニティ・スクールということを知っている生徒でさえもほとんどの生徒が家庭ではコミュニティ・スクールについて話したり、聞いたりしていない実情である。

● コミュニティ・スクールを導入することで、共通の目標・ビジョンを周知しているが地域や保護者に十分浸透していないところもあるので、導入のメリットも含めて繰り返し啓発していく必要がある。

● 「できる人が、できる時に、できる事を」という支援体制を周知し、地域で応援できる人を少しずつ増やし、さらに人材マップや支援団体の整備を進める。

● 学校にとって、コミュニティ・スクールは応援団である。行事支援・授業支援として地域人材を活用しているが、頻度的にさらに増やせると考えている。そのために特別な行事だけの支援ではなく、通常の授業等において地域学校協働本部の方々が「当たり前」のように、サポートできる状況をつくることが大切である。そうすることで地域学校協働活動の活発化も図られ、教職員はさらに多忙化減少につながると考える。そこから教職員にとってもより魅力あるコミュニティ・スクールになるはずである。